

# 「歴史観」を

# 養うための読書

山内昌之  
（東京大学名誉教授）  
武蔵野大学国際総合研究所特任教授



昭和二年、札幌市生まれ。歴史家。専攻は中東・イスラーム地域研究と国際関係史。カイロ大学客員助教授、ハーバード大学客員研究員、東京大学大学院教授、明治大学特任教授などを経て現職。富士通フューチャースタディーズ・センター（FFSC）特別顧問。ムハンマド五世大学特別客員教授なども務める。紫綬褒章、司馬遼太郎賞、毎日出版文化賞、吉野作造賞、サントリイ学芸賞などを受ける。『週末維新』に学ぶ現在（中央公論新社）、リーダーシップ、胆力と大局観（新潮新書）、『中東国際関係史研究』（岩波書店）、中東複合危機から第三次世界大戦（PHP新書）、『大日本史』佐藤優氏との共著、文春新書など著書多数。

不安と危機がまわりつく時代において、歴史を学ぶ重要性は以前にも増している。しかし、ただ事実を覚えて羅列するだけでは、私たちは「歴史観」を磨くことはできない。古今東西に精通する歴史家が、歴史の醍醐味と学び方、そして読書の意味と意義をあらためて考える

## 「バックトゥザフューチャー」

二〇二〇年から始まった新型コロナウイルスの感染拡大、二〇二二年二月に勃発したロシア・ウクライナ戦争

史」である。

人類はこれまでにじつに多くの試練を経験してきたし、その克服や挫折（ざせつ）についてさまざまなかたちで後世に伝えてきた。そうした先人の声に真摯（しんし）に耳を傾（かたむ）けることは、私たちが迷い込んだ隘路（あいつろ）を抜け出すうえでの光となりうるだろう。それでは、「歴史を知る」とは、具体的にどう定義できるだろうか。

歴史とはファクト（事実）の積み重ねだから、多くの知識をもつことは、たいへん重要な基本条件となることは間違いない。しかし、たとえば歴代の天皇や徳川将軍の名前や在位年数など、歴史の本質からすれば二次的なファクトをただ記憶したり羅列（られつ）したりできる人物は、真の意味で「歴史を知る」と評するに相応（ふさわ）しいのだろうか。もしもそうであるならば、テレビのクイズ番組の勝者が、もつとも歴史を知っている理屈になりそうだ。

私がそれよりも重要だと考えるのは、ある史実に対する歴史解釈に対して、これまでの常識ではありえないような、思いがけない見方や切り込み方を果たし、現在と過去の価値観の差異に対して興味や疑問を向けたりする

など、私たちはまさしく激動の時代を生きている。環境問題をはじめとする地球的な課題への対処も、かねてより叫ばれているところだ。容易には先行きを見通せない不規則な時代を、私たちはどのように生きるべきだろうか。そう考えたとき、一つの大きな指針となるのが「歴

ことだ。それが豊かな「歴史観」の持ち主と言えるのではないだろうか。東京の国立大学に勤務していたときに、私が兄事（けいじ）した人びとのひとりに勝俣鎮夫氏（東京大学名誉教授）がいる。日本中世史が専門で、代表作の一つ『戦国法成立史論』（東京大学出版会）では法制史の観点から中世と現代の常識の違いを指摘している。

その透徹（とうてつ）した歴史観には驚かされるばかりであったが、勝俣氏が齢七十をすぎて執筆した『中世社会の基層をさぐる』（山川出版社）の第一章は「バックトゥザフューチャー 過去と向き合うということ」という興味深いタイトルがつけられている。そうした「遊び心」も歴史を学ぶ人間には大切なセンスだが、何よりも特筆すべきは、同章で繰り広げられている「先（サキ）」という言葉に対する考察であった。

「先」という言葉に対して、基本的に未来を指す際に用いられると想起（そうち）する読者が多いはずだ。他方で、十五世紀半ばから十七世紀半ばの日本人、つまりは応仁の乱を経て織田信長、豊臣秀吉、徳川家康が覇を唱えた時代には、その逆で、「先」は過去を表す言葉であった。考え

てみれば、いまでも「先日」は過日と同義だし、大東亜戦争・太平洋戦争を呼称するうえで「先の大戦」という表現を用いるのは、その名残に相違ない。

なぜ、中世の日本では「先」という言葉を、われわれのように未来を指す意味として用いなかったのか。勝俣氏が考えるには、当時の日本人は未来とはそもそも自分たちには見通すことができない、神仏の支配領域だと捉えていたからだという。そして、「先」とは自分の目に見える範囲、すなわち過ぎ去った時代を指す言葉として用いられたと考察している。

現代を生きるわれわれは、ある種の知識の集積のなかで、また科学の発達もふまえて、未来とはある程度は予測できるものだと考えている。しかし、古代から中世の日本人は、未来とは自分の背中に広がっているかのような感覚をもっていた。だからこそ、日々を生きる手がかりを、自分たちの目の前に広がる「先」の世界、すなわち過去の歴史にヒントを求めたわけで、実際にそうして時代を切り拓いてきたのである。

このように、現代と中世では空間や時間の観念が大きく

人たちは、はたしてどのように振舞って問題を解決しようとしたのか。それを参照することは、とくに危機の時代を生きる私たちにとって、じつに意義深い作法であるのは間違いない。

なお、私が三十歳代の助教時代、勝俣氏と同じく多くを学んだのは、西洋中世史を専門とする木村尚三郎氏（東京大学名誉教授）であった。木村氏は勝俣氏よりも早くから「振り返れば未来」という表現を用いていた。過去に知恵がはらまれていると語りながら歴史を学ぶことの大切さを説いていたが、私や古代ローマ史を専門とする本村凌二氏（東京大学名誉教授）は、この二人の影響を色濃く受けたことを懐かしく想い出すのである。

### 歴史における「比較」の妙

歴史を学ぶ面白さの一つは「比較」にある。勝俣氏は現代と中世の価値観を並べて検討したわけだが、そのプロセスで私たちは新しい発見に出会い、「アイテム」を豊かにすることができる。この場合のアイテムとは、専

く異なる。この点を鋭く指摘した勝俣氏の着眼点には目を見開かされる。歴史をただの事実の羅列と捉えていたら、そうした着眼は得られない。同時に、勝俣氏が紹介した中世の人びとの過去との向き合い方は、歴史を学ぶ意味と愉しみを雄弁に物語っている。「バックトゥザフューチャー」という言葉のとおり、未来への問いを解くカギは、往々にして人類が辿ってきた経験のなかに眠っているのだ。

マキャヴェリの『デイスコルシ』は、歴史の「読み方」を考えるうえでじつに勉強になる一冊だが、そのなかで彼は「世の識者は、将来の出来事をあらかじめ知らうと思えば、過去に目を向けよ」と語っている。この世のすべての出来事は、過去によく似た事例を求めることができる、マキャヴェリは考えた。人は行動を起こすにあたって、つねに同じような欲望に動かされてきたのだから、同じような結果が生まれてきたのも当然というわけである。

私もマキャヴェリの指摘に首肯する一人だ。何がしかの試練や情景に接したとき、似通った場面に遭遇した先門と言い換えるとわかりやすいだろう。

たとえば、私はこれまでに専門の中東・イスラーム地域研究の分野で何冊も著書を上梓してきた。『スルタンガリエフの夢』（東京大学出版会、後に岩波現代文庫）ではロシア革命期のタタール人革命家であるミールサイト・スルタンガリエフ、『納得しなかった男』では青年トルコ革命の領袖エンヴェル・パシヤ、『中東国際関係史研究』（以上、岩波書店）ではトルコを共和制に導いた立役者の一人であるキヤーズム・カラベキルを、それぞれ一つの軸として叙述したものである。当然ながら、執筆に際しては数えきれないほどの公刊・未公刊の史料を用いたが、同時に当時は頭のなかに、じつのところ日本史における福島正則や井伊直弼、あるいは新井白石たちの生涯も浮かんでいた。意外に思われるかもしれないが、日本史を念頭に置きながら見通すことで、専門である中東・イスラームの歴史への理解を私なりに深めていたのである。

ある一つの地域や時代に詳しいだけでは、物事を類比することはできない。自分が好きな領域だけに閉じこも

つていては、その分だけ知識は増えるであろうが、歴史の大局的な見方はなかなか磨かれないのである。

では、歴史を幅広く学ぶにはどうすればいいのか。そのもつとも近道が「読書」であり、なるべく多彩な書籍を手取るべきなのである。もちろん、興味のある時代や人物の本を片っ端から読み漁ることも否定されるべきではないが、他方で、それだけでは歴史観を養うことは難しいだろう。これは歴史学に限った話ではなく、いかなるジャンルにおいてもオリジナリテイのある発見とは、そう簡単に生まれるものではない。そこで、さまざまの本を読むことを通じて、自分なりに時代や人物を比較することに大きな意味が生まれるのである。

とはいえ、いつの時代も、国と民の大事に与る政治家や高級官僚が読書や学問に身を入れすぎるのも禁物ではないか。彼らは学者とは違う。

江戸時代を例にとれば、大岡越前守 忠相が荻生徂徠に入門しようとした逸話を思い出す。徂徠は越前守に対して、あなたには「頓智」があり、よく訴訟を裁いており、いまから読書・学問をすれば、かえって「御役儀」

て知られるが、『歴史をどう書くか 歴史認識論』についての試論(以上、法政大学出版社)でやはり歴史を類比することの大切さを説く。

以上の文脈で、私が感心させられた一冊が、『世界の辺境とハードボイルド室町時代』(集英社文庫)である。現代のソマリランドなどを取材し続けているノンフィクション作家の高野秀行氏と、室町時代など日本中世史を専門とする歴史家の清水克行氏が縦横無尽の対談を繰り広げているのだが、まさに歴史における比較の妙を余すところなく表現している。

本書では、ソマリアの内戦と中世の応仁の乱などとの共通点が多く指摘されている。また、高野氏曰く、シリアやイラクでも一応は政権らしきものがあるが、ソマリアにはそれさえも存在しない。しかし、むしろ下手に都市や都会があるほうが治安は悪く、草原や高原の部族社会のように顔が見える社会では他者に危害を加えるという発想はないのだという。たしかに昨今の東京では、たとえば電車では肩がぶつかった・ぶつかっていないで大入同士が争っているし、一般市民が凶器を手にも他者に危

を軽んじ、務めが疎略にもなりかねないと自分への入門を勧めなかった。越前守は、学問をする者は役儀につけないというのかと疑問を呈する。すると、徂徠はやや手厳しく、次のように答えた。

「むかし大役をつとめた博学な人は、幼年期から学問をして自然に道を極めた人だ。学問は大道である。必要があるからといって急に学び、役に立てるものでもない。あなたのお役はお裁きにある。これまでの裁き方でよろしいのであり、人びとも得心してきた。当面の学問はかえってお仕事の妨げになる」(「八水随筆」『日本随筆大成』第1期6、吉川弘文館)。

徂徠の発言は現代の学者にも厳しい頂門の一針であるが、政治や行政にあたるリーダーにもあてはまることではないか。読書や教養は必要であるが、学者と政治家・官僚が同じである必要はないのである。

異なる国や時代、人物を比較の対象として扱えば何がしか自分なりに成果を得られる。ポール・ヴェーヌというフランスの古代史研究者は、『パンと競技場 ギリシア・ローマ時代の政治と都市の社会学的歴史』が代表作として知られる。高野氏も、勝俣氏や網野善彦氏をよりハードボイルドにしたような視点から、高野氏の話を受けて日本の中世との共通点を鋭く指摘する。そうして生まれる議論からは、まさしく歴史を学ぶ愉しみが存分に伝わってくる。私自身もありがたりの歴史観を大いに揺さぶられた一冊だが、歴史とはやはり一つの時代や地域を学んでいるだけでは得ることが難しい視点がある。

### 歴史を切り取ってはならない

ソマリアや中世の日本のように、私たちが生きる社会とは異なる世界を知ることには、「平和」を築くうえで大きなヒントを与えてくれる。それでもう一冊紹介したいのは、頼山陽の『日本外史』である。個人的には、司馬遼太郎の小説に匹敵するほど読んでいて面白い本である。

『日本外史』はしばしば、書かれている内容の根拠を疑

問視する向きもあるが、頼山陽は基本的に史実に忠実な人物であり、たとえば『坂の上の雲』のように人物を文学的に脚色したり創造したりはしていない。それでいながら叙述にすこぶる迫力があるのが印象的で、その迫力が何に依拠しているかを考えたとき、頼山陽は日本史上の合戦などを取り上げていても、大前提として平和とは何かを追求していることと無縁でないことに気づいた。

歴史が好きな日本人は、たとえば戦国時代に代表される中世史、あるいは幕末から日清・日露戦争にかけての近代史に魅力を感じる人間が多い。ところが私に言わせれば、そのあいだの江戸時代にどうして人気が集まらなかったのか、甚だ不思議である。これだけ平和を尊ぶ国民が、太平の世を築いた徳川幕府やその祖である徳川家康よりも、暴力や粛清にあげくれた信長や秀吉を賛美するのはなぜだろうか。

信長や秀吉は、戦国時代という過渡期を終えるために現れた、従来の日本にはいなかったタイプのリーダーだと私は考えている。彼らが凄まじい暴力を辞さなかったからこそ、たしかに時代は切り拓かれたのかもしれない。

したと明言されている。そのうえで、かつて徳川氏が戦乱を終結させた意味や、当時の日本人が平和な時代を生きる有難みをわかっていないと厳しく指弾する。

『日本外史』はつまるところ、源平二氏から徳川氏までの武家盛衰史であるが、頼山陽は最初から順を追って読んでほしいと語っている。歴史を一カ所のみ切り取ることは、大きな危険性をはらんでいる。たとえば、関ヶ原の戦いでは徳川家康と石田三成に限らず、毛利家や前田家、あるいは上杉家などそれぞれの立場を満遍なく読んでいかないと、どの家が正しくて悪いかという話になりかねない。もしも毛利家の視点だけを追いかけてしまえば、必然的に「徳川家に領土を奪われた」という怨みのエピソードになってしまう。

『日本外史』を最後まで順を追って読めば、平和な時代の尊さがわかると頼山陽は語る。結びの言葉はとくに印象的で、「衣類も荷物も無防備のまま、つまり甲冑などを着ることなく、食料をもたずに旅をできるのは誰の力であろうか」と尋ねている。

答えは当然ながら、兵乱が多かった歴史に終止符を打

い。しかし他の時代や人物に見向きもせず、信長や秀吉の活躍ばかりを追いかけていては、現代に活かせる学びの射程は限られてしまう。

むしろ、秀吉が関係を悪化させた朝鮮や中国との関係を修復するなど、東南アジアに平和貿易という概念を用いた徳川家康にも目を向けて然るべきだろう。二百七十年の徳川の太平の世はたしかに「血湧き肉躍る」時代ではないかもしれない。しかし、平和や持続可能性がテーマになるこれからの時代を考えるうえで、間違いなく重要な参照軸となるはずだ。

頼山陽の『日本外史』に話を戻すと、私には本書が誤解されているように思えてならない。というのも、幕末に勤王の志士に影響を与えた印象が強いかから、現代の日本人の多くが「反徳川」「反江戸幕府」の書物と捉えているように感じるのだ。しかしじつのところ、その見方はまったく正しくない。

その冒頭には「例言」として本の要旨が書かれているのだが、そこでは「我が徳川氏」という表現が用いられているばかりか、徳川幕府が平和と繁栄の統治をもたら

った徳川家康の功績こそ大きいということを、彼は一貫して主張した。以上をふまえれば、『日本外史』を素直に読めば倒幕を促す本ではないことがわかるはずだ。そして、歴史の一部分だけを切り取って学ぶことの危うさを、頼山陽の言葉からは窺える。

頼山陽は『日本外史』で乱世の中世を描くことで、逆説的に平和の重要性を説いた。「人命至重」という言葉を用いているように、そもそも何よりも人命に重きを置く思想の持ち主であったし、海外への侵略や膨張も否定するような人物であった。

ところが、そうした考え方と相容れなかった人物が幕末に存在した。誰もがその名を知る、長州藩の吉田松陰である。

#### 吉田松陰が陥った「ヘロドトスの悪意」

私も例に漏れず松陰を、日本史を語るうえで欠かさない人物だと評価している。しかし、松陰自身、『講孟余話』で歴史を学ぶ大切さを強調しているものの、「日

本外史』の読み方については問題があったと指摘せざるを得なく。

濱野靖一郎氏が著した『頼山陽の思想 日本における政治学の誕生』（東京大学出版会）によれば、松陰は松下村塾で『日本外史』を毛利氏の部分から講読することが多く、徳川氏の記述を弟子たちと一緒に読むことにはなかったという。また、毛利元就は主人である大内義隆に謀反した陶晴賢を討ったが、松陰は毛利氏の「義」を強調した。加えて、関ヶ原の戦いで毛利家は領土を削られたことを紹介し、門下生が長州藩の受けてきた屈辱を学ぶように『日本外史』の読み方を教えた。

それも一つの歴史の学び方ではあるだろう。しかし率直に言えば、私はそうした『日本外史』の「誤読」、さらにいえば一側面をことさらに追究する姿勢そのものに、歴史観を養う方法としては疑問を抱いてしまう。

歴史とは学び方によって、人びとを過激な方向へと導きうる。また歴史叙述が公正ではなく、いわば悪意に覆われている例は枚挙に暇がない。じつは、前五世紀に古代ギリシャのヘロドトスが書いた『歴史』は悪意の塊だ

の意味で公正な歴史の見方など存在しないのかもしれない。だからと言って、偏った歴史観を磨き続ければ物事の本質を見誤ってしまうだろう。

### 文学作品との対話が「幅」を広げる

昨今、いわゆる「歴史好き」は、往々にして司馬遼太郎や池波正太郎、山岡荘八に代表される歴史小説を指してその口になっている。あるいは、『鬼平犯科帳』のようなドラマや映画を歴史として信じているのかもしれない。もちろん私もそうした作品は好きだし、エンターテイン

という説がある。そう唱えたのはプルタルコスで、彼は「ヘロドトスの悪意」という論で、悪意をもって歴史を叙述する特徴として八点を挙げる。

第一は出来事を叙述するときに極めて過酷な言葉や表現を用いること。第二はある人物の愚行を強調するため無関係な話題をもち出すこと。第三は立派な業績や称賛に値する手柄を省略すること。第四は同じ出来事への解釈が複数あるとき、悪いほうを選び取る。第五は事件の原因や意図がはっきりわからない場合、敵意と悪意から信じるに値しない推論に手を伸ばすこと。第六は人の成功を金銭や幸運に拠るとして功績の偉大さを減らすこと。第七は婉曲に誹謗の矢を放ちながら、途中で非難を信じていないかのように公言すること。そして第八は少しだけ褒め言葉を付け加えて難癖を薄める書き方をすること——である。

松陰は「ヘロドトスの悪意」の第三などに囚われてしまっており、平和を築いてきた徳川幕府の功績をまったく無視している。もちろん、「ヘロドトスの悪意」とは松陰に限らず誰もが無意識に陥りがちな悪弊だし、本当

メントとして優れているのは論を俟たない。そこで描かれている世界は歴史そのものではないから、小説やドラマだけで歴史観を培うことができるかといえば難しいだろう。他方で、自身の「幅」を広げるうえでは、古今東西の文学作品などに触れることは大きな意味をもつ。

先ほども紹介したポール・ヴェーヌは古代史の研究者だが、彼はルネ・シャールという詩人に入れ込み、実際に会いに行くにとどまらず評伝まで著している。考えてみれば、古代史の研究でも『オデュッセイア』のホメロスを抜きには語れないわけで、その意味ではヴェーヌが詩人に関心を抱いたのは不思議ではない。これは日本史

PHP新書

# 忘れる読書

本の読み解きを通して現代社会を生き抜く思考法までが学べる。  
知的興奮に溢れる一冊。

教養とは「気づく力」であり、それを身につけるには読書に優るものはない。そう、い切る落合氏の読書術・思考法・愛読書を学公開

落合陽一

定価:1,100円(10%税込)

PHP研究所  
<https://www.php.co.jp/>

にも言えることで、『新古今和歌集』を無視して中世史を理解することはできない。歴史を知るうえで文学とはあえて切り離すべき存在ではなく、むしろ歴史観を養ううえで重要なヒントにもなりうる。

私の体験を話すならば、もつとも好きな江戸時代の随筆の一つが松浦静山の『甲子夜話』（平凡社東洋文庫）であり、静山その人にも関心があるので、その領分の平戸を訪ねたりもした。問題は、歴史を学ぶに際してはなるべく発想を自由にすべきだし、その意味では歴史の所産としての小説や随筆に触れることも大きな意味をもつということだ。江戸随筆という特異なジャンルを史料でないというのは、あまりに狭い料簡ではないだろうか。結局のところ、歴史観を広く偏見なく養うには、さまざまな国と多様なジャンルの書物に向き合うに越したことはないのである。

この点で学ぶべき人物の一人が、寛政六年（一七九四）に幕府の「学問吟味」に最優秀の成績を収めた遠山景晋の例である。「遠山の金さん」の実父として知られる旗本きつての秀才は、何も朱子学や漢学の本ばかり読

んでいたわけでない。蝦夷地への出張に際して書いた紀行文のなかには、各地の地誌などについて『万葉集』『大和物語』『無名抄』、あるいは西行の歌といった和学や歌書から学んだものが多い。さらに、出張との関係で読んだ書物には、『蝦夷拾遺』『東遊記』『蝦夷志』『北海随筆』など北方関係のものが目立つ。また、『暮太平記白石噺』といった仇討ち実録物まで読んでいる。

彼は、その後も長崎や対馬へ出張する折に土地に關係する書物を読んだものだ（『長崎奉行遠山景晋日記』清文堂出版、藤田覚氏解説）。幕府役人として不可欠の基本教養として儒書に通じていただけでなく、和書さらに琵琶までよくしたというから、まことに幅の広い人物といえはかない。景晋が初めて役職についたのは、三十六歳のときである。養子に入り、三十五歳で家督を継いだ。この長い不遇の時期に、読書と学問を重ねたのだろう。荻生徂徠がもしも後世の遠山景晋をもし知る機会があったなら、これこそ「幼年より学問して、しぜんにその道を得たる也」と、同じ旗本の大岡忠相に模範とすべしと助言したかもしれない。